里山管理の意義と課題

九州芸術工科大学芸術工学部　重　松　敏　則

EFFECTS AND OBJECTS OF COPPICE MANAGEMENT

Toshinori SHIGEMATSU *Kyushu Institute of Design Department of Environmental Design.*

里山の多くは薪炭材や有機堆肥源となるアカマツ林と雑木林で占められるが，屋根材や生活材を得るカヤ場，竹やぶなども含まれる。薪炭材では15～30年周期の伐採と５～６年周期の下刈りが，毎年小規模に行われるが，これにより林地に陽光が入り，また結果的に里山は多様な再生段階の林地や原野で構成されることになる。従って，里山には原野性から森林性まで，また好陽性から耐陰性のものまで，多様な動植物の生活環境が用意されることになった。

このように多面的な環境保全機能や生態系を壊すことなく，管理・利用されてきた里山は，四季折々の景観や山の幸を愛でる人々の遊山の場となり，日本の伝統文化を培った素材と情景の場ともなった。

しかし，現在では生産的役割を失い，密生するままに放置された里山では，自然遷移により種組成の貧化が進んでいる。その一方でスギ・ヒノキ林への転換，宅地造成やゴルフ場開発，さらに近年ではゴミ投棄も問題となっている。都市化の進行により里山が有する環境保全機能や，緑地的役割が以前よりも増しているにもかかわらず，保全・管理のための担い手も法制度も欠く実状にある。

このようなとき，生き甲斐や健康づくり，コミュニティづくりの場として，市民参加による里山管理が考えられる。これは地球環境危機の時代に市民が自然環境に対する認識を深め，ライフスタイルの転換や連帯をはかる契機にもなる。筆者の調査や英国BTCVの実績からみて，我国でも市民参加による里山管理の潜在力は高いが，その実現には行政や企業による積極的な助成や，余暇活動として気軽に参加できる組織・運営システムなどの確立が不可欠である。

里山管理の全てを市民が担うのは困難で，多くは自然遷移にゆだねることになるが，市民が里山管理に関わることで，森林保全に対する社会認識や法制度，行政施策の向上が期待される。